究極のご飯の祭典

米-1グランプリ

1万人が米の魅力を堪能

お米や米粉を使った料理とスイーツで、味やアイデアを競う「米-1（べいわん）グランプリ」が十月十五日から二日間、地域づくりグループ「やらこい奥出雲」を中心とした有志約五十人による実行委員会が主催し、横田運動公園多目的広場で開催されました。

このイベントは、お米や米粉を使った料理・スイーツを県内外の店や団体が販売し、料理部門とスイーツ部門に分かれて、来場者の人気投票を行うもので、昨年に続き二回目の開催です。

▲賑わう会場

今年は、四十三店が、五十九品を出品。期間も二日間と、昨年の好評を受け、約二倍の規模で開催されました。

会場には、ご飯を使ったハンバーガーやコロッケ、麺類、米粉を使ったプリンやケーキなど趣向を凝らした多彩なメニューが並び、二日間で一万人を超える来場者で賑わいました。

また、十六日には高校生の出店による「米-1甲子園」も開催され、イベントをさらに盛り上げました。

実行委員会の足立雅人委員長は「米や米粉の素晴らしさを見直してほしいと思い開催し、県内外から多くの方に来ていただき喜んでいただいた。イベントの活気を奥出雲町の元気につなげていきたい」と話されました。

米-1グランプリ　入賞者

【料理部門】

◆グランプリ
「イタリアン風仁多米ラーメン」

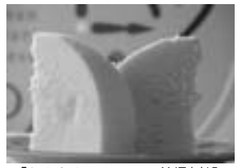
【JA雲南米-1GP開発プロジェクト(雲南市)】

◆準グランプリ
「チーズ職人のチーズリゾット」
木次乳業×漁人(雲南市)

◆第三位
「玄米コロッケ」
ともこあさつの健康そうざい(出雲市)

【スイーツ部門】

◆グランプリ
「杜のズコット」



【うんなんスイーツの杜(雲南市)】

◆準グランプリ
「まるごとお米のシュークリーム」
JA雲南米-1GP開発プロジェクト(雲南市)

◆第三位
「梨蜜みたらし はしまきだんご」
ウイーン菓子リンツ(鳥取)

最優秀販売賞
JA雲南米-1GP
開発プロジェクト(雲南市)

米-1甲子園グランプリ
「内田くん家の米粉ケーキ」
横田高校(内田チーム)

奥出雲と神話のイメージをまとう観光型バス

～島根デザイン専門学校生がデザイン～

▼中本昌樹さんのデザインが施されたバス

奥出雲をイメージするデザインを施した観光型バスが新たに導入されることになり、入庫式が十一月四日、奥出雲交通(株)で行われ、デザインを考案した島根デザイン専門学校生をはじめ関係者約二十人が出席しました。

今回導入されたバスは、客席が二十八席、中型タイプ。車体には、力強い「奥出雲」の文字とともに、青色を基調とし、オロチや斐伊川をイメージしたライン、背面には鮮やかな色のもみじの葉が描かれています。

式では、井上町長から「素晴らしい出来映えに驚いた。奥出雲の地域資源が描かれたこのバスで、奥出雲を一層PRしていきたい」とあいさつがあり、受賞者に記念品が贈られました。

また、デザインを考案した、島根デザイン専門学校ビジュアルデザイン科一年生の中本昌樹さんは「オロチは、怖ろしさの象徴であり、繁栄の象徴でもある。オロチ神話のシンボルである斐伊川をイメージし、その荒々しさと優しさを描いた。デザインとともに奥出雲の良さをお客様に感じてほしい」とデザインへの思いを話しました。

式の後には、尾原ダムのさくらおろち湖周辺を走る試乗会が行われ、乗客から、乗り心地の良さに好評を得ていました。

このバスは、町内外の観光に利用され、デザインとともに奥出雲のPR効果が期待されます。

「夢を持つことから全てが始まる」

横田高校で講演とワークショップ

◀夢の大切さを説く宮治さん(右)

十月十八日から三日間、横田高校で、就職や専門学校進学を志望する三年生を対象としたキャリア形成セミナーが行われました。

初日には、養豚業「(株)みやじ豚」代表取締役の宮治勇輔さんが生徒五十二人を対象に、夢を持つこと・描くことの大切さについて講演とワークショップを行いました。

宮治さんは、自らが現在の仕事を目指した経緯を話す中で「わずかな出来事が将来を決めるきっかけとなる。そのために向上心を持ち人間力を高める必要がある」とした上で、「時間を忘れて熱中したことを思い出す」「目の前のことに懸命に取り組む」などを挙げた「夢を持つための七箇条」を紹介。生徒たちに「夢を持とうと努力し続け、行動することが大切」と熱く語りかけました。

また、講演の後には、行きたい所ややりたいこと、感謝している人の名前を書き出すといったワークショップを行い、「夢は知識。自分が知っていることからしか描けない。過去の積み重ねが現在の自分をつくっている」と、夢を持つためのヒントを伝えました。

参加した生徒は「自分の将来を考えるために、良い時間を過ごすことができました」と感想を話し、講演とワークショップを通して、夢を持つことの大切さについて考えを新たにしていました。

このほかにセミナーでは、栄養士による料理教室、NPO法人出雲学研究所の川島芙美子さんによる風土記講演会が行われました。

横田高校生の仮想会社「だんだんカンパニー」

東京で手作りジャムを販売

横田高校の二年生四十九人を社員とし、活動を通じて企業活動や地域振興について学ぶ「だんだんカンパニー」が十月十八日から二日間、東京都にあるアンテナショップ・にほんばし島根館で、自ら企画・製作したブルーベリージャムの販売に挑戦しました。

◆自分たちで材料収穫と製造

今年度の活動は、七月二日にスタートし、初日からジャムの材料となるブルーベリーの収穫を行いました。

七月下旬には、実際にジャムの製造に着手。町内でブルーベリーの栽培や加工販売を行う岡田篤志さんの手ほどきを受け、百八十グラム瓶で約二百五十本分を作りました。

▶瓶詰め作業の様子

◆東京での販売に向けて

会社では、組織で仕事をする学ぶため社員を購買部、マーケティング部、経理部に配属し活動を行いました。

七月二十六日には、社長である佐藤勇人校長から辞令が手渡され、生徒たちは東京での販売に向けて意識を新たにしました。

また、九月九日から三日間、生徒の代表四人が、リーダー研修として、東京で奥出雲町の特産品の販売を行いました。

これは、(有)中村ファーム(下横田)の協力により実現したもので、参加した四人の生徒たちは、実際に店頭で商品を売り、その大変さを体感しました。後日、研修報告会が行われ、報告を熱心に聴き、生徒たちは、ジャム販売に向け課題の共有化を行いました。

◆ついに販売開始

～店頭で商品を手売り～

九月上旬に、経費と利益の計算、にほんばし島根館の客層を分析し、価格を決定。十月七日には、商品完売への気持ちを込め、試行錯誤を重ね作りあげた商品ラベルを社員全員で貼り付けました。

十月十八日、ついに東京での販売の日を迎えました。生徒たちは、自分たちが作り上げた自信の商品を、来館者に懸命に売り込んでいました。

▲東京での販売の様子

目標とした、ジャム二百二十個の完売とはならなかったものの、二日間で百八十一個を売り、生徒たちは十分な手応えを感じてしました。

また、東京での販売という一つの大きな目標を達成し、達成感に満ちた表情を浮かべていました。

今後は、結果の分析と損益の把握などを行い、十二月には活動の総括を行う予定です。